

# われらはネコなのだ



撮影・作 ヒロシ

# にんきもの



ラッキーセブン



三位一体



# ステルスキャット



# わたし待つわ



# みんなで仲良く



# 日課



# 振り返ればネコがいる

## コラム その1

初めて田代島に行く日、期待に胸を躍らせつつも若干の不安を抱いていた。

期待というのはもちろん沢山の猫達に逢えることであるが、一人旅というのが心細かったし船酔いも心配だった。

そして何よりも肝心の猫達に逢えるかどうか・・・。

本土では2月の寒空で、雪が積もっていた。田代島は比較的温暖であまり雪が積もらないというがどうだろう。

色々と考えている間に出航の時間になった。

その日、本土発の船に乗ったのは僕を含め4人。

益々不安が大きくなった。平日だから少ないのか、季節外れだから少ないのか、この時期に行く僕は無謀なのか。

船が港を出た時、もう引き返せないと自分に言い聞かせた。

思いの他船が揺れなかったのが不安の種の一つだった船酔いは大丈夫そうだったのでデッキに上り水平線をしばらく眺めていた。するとぼんやりと田代島らしき孤島が見えてきた。

胸が高鳴る。

島の周囲は断崖絶壁でそこから内陸部が想像できない。

この島が「猫の島」なのか・・・？



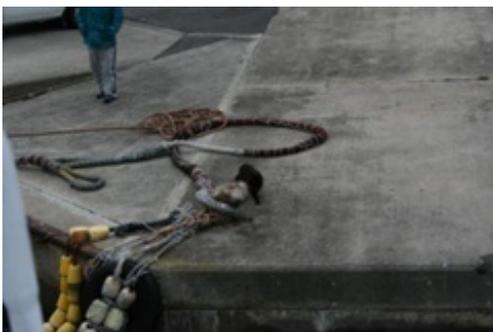
船は大泊を通過し、目的地の仁斗田港に向かった。

いよいよ田代島上陸間近。デッキから仁斗田港を眺める。

不安だらけの僕の目に飛び込んできたのはお迎えの一匹の猫さんだった。

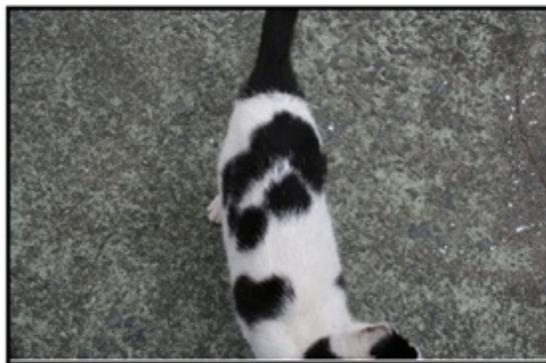
いたいた～！！逢えたよ～！！この瞬間早くも目的が果たせた気がした(笑)

そして船を降りた時、田代島の本当の魅力を知るのであった。(つづく)



「いらっしゃいニャン！」

## 7番VSタモさん



## ノープロブレム



# ルキヤットミー



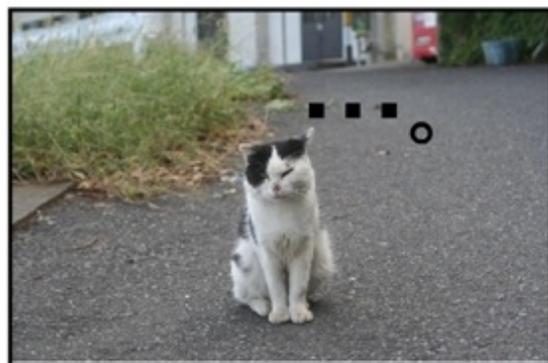
# 躊躇い



## ご用心



## 天下り大国



## 明日があるさ



# 振り返ればネコがいる

## コラム その2

猫のお出迎えに喜びカメラを構えた僕にその猫は少しの警戒心も見せず寄ってきた。なるほど噂どおり人間に慣れている。

他の猫もそうなんだろうかと思っていると車や待合所の陰から次々と猫が姿を現した。どの猫も警戒心が無くどんなに近づいても逃げない。あっという間に5～6匹集まった。

写真を撮っているとクンクンしにきたりお尻をスリスリされたり猫パラダイスである。

島の内部に行こうと歩き出すと猫も歩き出す。やがて各々散らばり、その間に新たな猫が参入する。

町中で人と人が擦れ違うように人と猫が「普通に」擦れ違う。この「普通に」が恐ろしいくらい「普通」なのだ。「こんにちは～」と声を掛けてしまいそうになる。

道のド真中でも「普通に」寝ている猫もいる。港付近の道は車やバイクが猫を避けて走る。そういった風景は猫と人間が本当に共存しているのだとつくづく感じさせられる。

良い島だなあ～と猫や景色（超大自然）を楽しみながらしばらく歩いていると猫が見当たらなくなかった。民家もなくなり人すら見当たらなくなかった。この島は住民よりも猫のほうが多いのだ。

これ以上進んでもいそうにないと思い一度戻ることにした。



さてと振り返って驚いた。猫がいるではないか。

野良猫＝鈴がついていないのでヒタヒタとついてこられると気が付かないのである。

殆ど上り坂の道程で若干の疲れを感じここでしばらく猫と戯れた。

あいにく餌や遊び道具など持ってきていなかったが（というか田代島は基本的に餌は禁止である）猫達は僕の疲れを存分に癒してくれた。

に癒してくれた。

体力が回復したので来た道に戻るとさっきまでいなかったところに猫達が休んでいた。先ほどの反省を踏まえ何度か後ろを振り返ると、なるほど確かに湧き出てきている。もしかして360度猫がない時なんて無いのではないかと思うくらいだ。

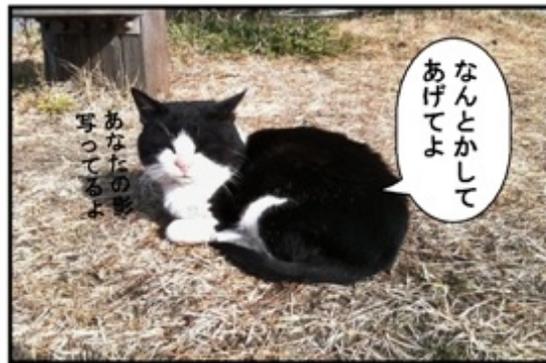
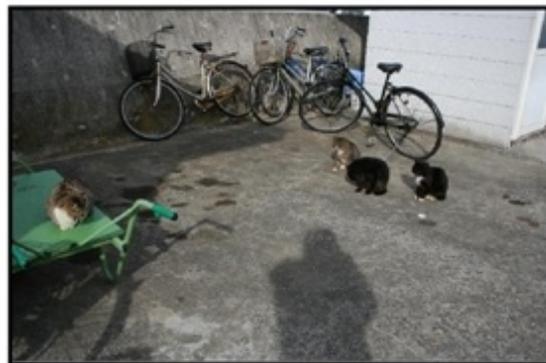
田代島では時間がゆっくりと流れる。

しかしその分帰りは名残惜しい。

これ以降島の魅力にとりつかれ何度も田代島に足を運ぶことになるのだが初めて行ったときの思い出はいつまでも色褪せないでいる。



# え、オレ？



# 青春



# 平和主義



# ちゃんとやれよ



# ぽぽぽぽ〜ん



## これから増えるのよ



## 定位置

